

フリッピング 2015 1話 「T O Y」

舞台上、いくつかのダンボール。

SE 雨の音

囲まれて寝ているのは染井（小石川）、そこに入ってきてキヨロキヨロしているのは風間（藤谷）、雨が降っていたのか。傘を閉じながら入ってくる。

傘をそのへんに立てかけて。

風間 「あの・・あの・・・」

染井 「・・・・・・・・」

風間 「すいません」

染井 「・・・・・・・・」

風間 「何かに似てる！・・・あ。これか！（カバンについているおもちゃを見て）

10歳の誕生日にお母さんに貰ったおもちゃに似てるこの人。愛着湧いちやうなあ。

モデルの人かなあ。プロモデルの人かなあ」

染井 「・・・・オーディエンスで・・・・」

風間 「え？ 寝言？ 夢を見てるの？」

染井 「・・・Aのポップコーン正一・・・」

風間 「ミリオネアの夢なのかしら、すごく問題が気になる、Aがポップコーン正一、

Bが正二だとして、CとDはなんのかしら」

染井「・・・・テレフォンで・・・・」

風間「ねえ、一問でそんなにライフライン使っちゃダメだよ」

風間の携帯がなる

風間「え？私に？ど、どういう構造で！？テレタビー？テレタビーなの？」

(電話に出る) もしもし・・・あ、なんだ、おじさんか、テレタビーかと思った。

ううん、なんでもない。え？テレタビーだよテレタビー、ほら、こう

超能力で会話する・・・あ、テレパシーか、恥ずかしい。じゃあ逆に、

おじさん、テレタビーって何？なんか、カラフルな、頭がニョーンとなつた

生き物・・・？(カバンについてるおもちゃを見て) あ、これか、

7歳の誕生日にお母さんに貰ったやつ。これテレタビーって言うんだ。

え？あ。うん、ついたんだけど・・・・今、ミリオネアの最中、多分。

私もよくわからない」

染井「(ガツツポーズする)」

風間「今、正解したみたい」

染井「・・・もちろん・・・やります」

風間「ドロップアウトしないみたい。わかんない。なにこの状況。

処理しきれないよおじさん、だから一緒に来てって言ったじゃん。言ったよ？

覚えてないけど、言ったよ。そしたらおじさんこう言ったんじゃん。

・・・・覚えてないけど、とにかくおじさんは断ったんだよ。

だから一人で来てるの・・・・うん、まあそりやあ関係ないけどさ」

染井「竹下景子さんに300点」

風間「どうしよう、番組変わっちゃった・・・私としては手堅くはらたいらさんに

行った方がいいと思うんだけど・・・おじさんは・・・宮崎美子さん？

それあれじゃん、竹下景子さんの産休中の代役じゃん・・・。

うん、わかってる。この人に話を聞かないと何も進まないんだよね・・・。

やってみる。おじさんありがとう。じゃっぱい！・・・・じゃっぱいっていうのは、

じゃあねとバイバイを繋げた新しい言葉なの。うん、作ったの今。うん、

じゃっぱい、うん、じゃあね、はーい（電話を切る）寝てるんだよね、これ・・・」

染井「ここは・・・スーパーひとしくんでいきます」

風間「答えに自信があるみたいね・・・よし、起こさなきや。よくわかんないけど、

彼をクイズバラエティーループから救い出さなきや。えーと、起こすもの。

(カバンをゴソゴソする、バールのようなものを見つける)・・・うん、仕方ないか。

ごめんね、起こせそうなものがこれしかないので。ゴーリー。あ、ゴーリーってのは

ごめんとソーリーを合わせた新しい言葉ね。（振りかぶる）」

染井 「(起きる) え？」

風間 「え？」

染井 「何？」

風間 「いや、起こそうと」

染井 「起こそうとしてるようには見えない」

風間 「どう見えます？」

染井 「殺そうとしてるよう」

風間 「起こそうとしてるんですけど」

染井 「バールで起こそうとするかよ、バカ」

風間 「ちょ！ 訂正してください！」

染井 「訂正しないよ、きっと馬鹿だもん」

風間 「バールじゃないです、これはバールのようなものです」

染井 「馬鹿だ」

風間 「馬鹿じゃない、バカのようなものです」

染井 「バカのようなものがなんの用だよ、あ、あれか、また逆恨みか、

逆恨みされたってしょうがないだろうけど、俺じゃない、俺のせいじゃない」

風間 「逆恨みってなんです？」

染井 「辞書引け」

風間 「いや、意味はわかりますよ。逆恨みの意味はわかります。

調べたことあるし、マーカーで赤い線だって引いてるし、ページの角だって

折り曲げてるし、ポストイットだって貼ってます。

あまりにも開きすぎたために、逆恨みのページが開きやすい感じになっている

ぐらいですから」

染井 「何回も調べてるって事は何回も忘れてるって事だろ」

風間 「ま、まあそなんんですけど、でもこれでわかったでしょ？私は知らないことを

調べもしないで放置する人間じゃないってことですよ」

染井 「えっと、邪魔」

風間 「邪魔じゃない」

染井 「仕事中なんだよ、仕事っていうと語弊があるかもだけど」

風間 「寝てたくせに」

染井 「寝るのも仕事だ」

風間 「夢の中でクイズ番組に出てたくせに」

染井 「なんでそれを知ってんだよ、っていうかお前誰だよ！！」

風間 「あ、聞きました？今、私が誰か聞きました？聞いて驚いてくださいよ」

染井 「やっぱいいや」

風間 「失わないで、興味を失わないで」

染井 「俺が願うのは、一つだけ、邪魔をしないで欲しいってことと、

早く出ていって欲しいって事、あと話しかけないで欲しいって事」

風間 「一つじゃないじゃない、この強姦魔！」

染井 「人聞きの悪い悪口を言うな」

風間 「私だってあなたと話をしたいわけじゃないんです。あなたしか居ないから

あなたに話しかけてるだけで、ほかの人がいればほかの人に話しかけてるんです。

だから、はやく出してください、ほかの人」

染井 「ほかの人ってなんだよ」

風間 「あなたじゃない人って事ですよ。できれば速水もこみち」

染井 「できればって」

風間 「できないんですか」

染井 「できないよ」

風間 「じゃああなたに話しかけますけどいいんですね」

染井 「・・・いいよ」

風間 「やったー！いえい！くふふつふ！！うえーい！へーい！すペペペ！！

みやーん！あーい！！」

染井 「喜んでんのか？」

風間 「そいやー！（ダンボールを蹴る）」

染井 「蹴るな！！」

風間 「ゴーリー！！」

染井 「なんだそれ」

風間 「あ、ゴーリーっていうのはごめんとソーリーを掛け合させた」

染井 「ああ、いいやそれも。うんと話が全然進まないんだけど」

風間 「あなたが聞いてくれないから」

染井 「聞いてるだろ、聞きすぎるほど、優しいだろ俺。突然仕事場に入ってきた

謎の女にこんなに付き合ってやってんだぞ」

風間 「謎の女じゃありません、私は謎じやない女です」

染井 「わかった」

風間 「何が」

染井 「話を聞こう」

風間 「よし、根負かした」

染井 「一つ一つ聞こう」

風間 「いきなりスリーサイズでもいいですよ」

染井 「お前誰だ？ここに何しにきた？本当に逆恨みじやねーんだな？」

風間 「一つじゃないじゃないの、この連續放火魔！」

染井 「なんで悪口が犯罪なんだよ、いや、もう、答えろよ」

風間 「この工場に風間さんっていうでしょ？」

染井 「…………」

風間 「いるの？いないの？」

染井 「ああ、うん」

風間 「私は、その風間の娘です」

染井 「…………」

風間 「どう？びっくりしました？」

染井 「帰れ」

風間 「なにを！？」

染井 「真面目に聞いて損した」

風間 「損させてない！」

染井 「帰れよ」

風間 「なに？なにか悪いこと言いました？もしかして NG ワード？」

夢の中で「クイズ！年の差なんて」にも出場したの？」

染井 「嘘じやねえか。逆恨みならまだましだ。お前それ嘘じやねえか」

風間 「嘘じやないよ」

染井 「あのなあ、社長には娘なんていないんだよ、娘どころか、息子も

嫁も、あの人ずーっと独身だったから」

風間 「嘘つき」

染井 「嘘つきはお前だ！」

風間 「私じゃない、嘘ついてるのは、その風間って人」

染井 「やっぱり嘘なんだな、父親を風間って人なんて呼びかたするかよ」

風間 「するよ、風間って人って言っちゃうよ。私だって、昨日知ったんだから」

染井 「昨日？」

風間 「昨日突然、この手紙渡されて、会ってこいって。これがお前の父親だからって。

あーそうです。若干私不幸なんです、ばれましたか？」

染井 「なんだよ急に」

風間 「就職だってね、ずっと決まらないんです。なにしろ不幸ですから、

デフォルトで不幸のレベルが相当高いんです。私。そりやあ、あなたにだって

そっけなくされたって話しかけちゃいますよ。昨日まで

49日間引きこもりですから、久々に親戚以外の人と話したんだから、

言いたいことが山ほどある！！でも誰にも言えないで、今日まで、

生きてきたの！だからしょうがないでしょ。我慢してよ」

染井 「うわー」

風間 「引かないでよ、いや、引くのはしょうがない。だって私の不幸話をいたら

そら、引きますよ。みんなうわーって言います」

染井「そわーあ」

風間「そ、そわあ？それは、初めて言われたし、意味わかんない」

染井「それで？」

風間「なにが？」

染井「不幸話」

風間「聞くんですか？」

染井「興味あるな、不幸話」

風間「半端ないですよ」

染井「不幸話は半端なくないと」

風間「まずどれから話そう。どの不幸から話そう。話数がこち亀なみにあるんです。

100巻以上続くんです」

染井「搔い摘んでくれ」

風間「生まれたときにはもう父親はいなかったのね、それはなんとなくわかるでしょ？」

だから私はサンタクロースなんて信じてないの。だっていないから、

貰ったことないし。あ、だからと言って、なにももらえない幼少期じゃなかったよ。

毎年誕生日にはおかあさんがおもちゃをくれたの。これが、5歳の時にもらった

飛行機のおもちゃね。見てこれ、わかる？翼がもげてるの。ほら、5歳児なんて、

おもちゃの遊び方なんて雑の極みでしょ、遊んでたらなんとなくもげちゃったわけ、

そしたら次の日、どつかの会社の飛行機が墜落して、それからあだ名は悪魔の子。

いじめの発端なんてそんなもんでしょう？そのいじめはなんと10年続きます。

義務教育終了まで、悪魔から派生して、デビ子、デイビット、伊藤、イット、

一等、ハワイ、ペア旅行、ツーリスト。色んなあだ名で呼ばれて、中学卒業時の

あだ名は、末期ガン。まさかの病名、しかも重いやつね。15歳の時に、今度は、

この列車のおもちゃを貰ったの、もうおもちゃはいいっていったんだけど、

お母さんは、おもちゃで遊ぶ私が好きだったみたい」

染井「それ」

風間「そう、これも壊れてる」

染井「列車事故か」

風間「そうなの。でもね、もうその頃には、無視されてたから。関わると不幸になると

思われてたから。だから全然平気だった。むしろ逆にすごいんじゃない？私って

思ってたもん。ノストラダムスじゃね？みたいな」

染井「1999年」

風間「あ、この地球のミニチュアは8歳の時に貰ったけど、これは壊れなかつたから、

まあ良かったんだけどね。ほら、カバンに着けてんの全部、

誕生日にもらったおもちゃ。これはね、私の業なんだよねえ。だから

カバンにつけてんの。文字通り背負ってんの。それで、このバスのおもちゃ。

これね、今年の誕生日にお母さんがくれたんだけど、最後のプレゼント

だったんだけど、お母さん、先月死んじやったんだけど・・・」

染井「バスのおもちゃって・・・これが」

染井、ダンボールからバスのおもちゃ出す

風間「そう、やっぱりそうだ。全部おもちゃはこの工場で作られてる。

お父さんの工場。箱見たら全部作ってるのこの工場なんだ」

染井「毎年のプレゼントは父親からだった」

風間「だから、私は、この不幸の連続を、私の業を終わらせに来ました」

染井「残念ながら」

風間「残念ながら、そうなんです」

染井「それは無理だな」

風間「お父さんを呼んでください」

染井「バールを持ったお前の前に？」

風間「バールのようなものです。どうせ引きこもってんだからいいんです。

それが家なのか隣の中なのか、そんなのどうでもいいんです。

お願い、ここにお父さんを呼んで」

染井「よくわかんないけど」

風間 「よくわかんないでしょうよ」

染井 「やっぱり逆恨みだな」

風間 「逆恨みじやない事は確認済みです。何回も調べたんですから、

その上で断定します。これは恨みです」

染井 「復讐的な？」

風間 「復讐的ではないです。復讐です。もちろん、こんな話を聞いて、

すごすごと、お父さんを呼んでくれるとは思っていません。

だから、呼ばないと、このバールで」

染井 「ののようなものな」

風間 「そうです、の、ようなものです」

染井 「あのさあ、もういいだろ」

風間 「もう良くないです」

染井 「もういいんだよ」

風間 「なんで？私が話しただけですっきりする女だと思ってるんですか？

だとしたら見くびられたもんですね！私は、実行力にかけては、

自信があるんです。やるといったらとことんやります！」

染井 「だから、もういいんだって」

風間 「もういいもういいって、あなたもしかして、ミスターもういいですか？」

もういいオブザイナーに選ばれたことあるとか？そんな賞ある？ないね！！」

染井「よく見ろ！！」

風間「なにを！」

染井「バス！」

風間「バ、バス？バスがなによ！」

染井「お前のバス、これと比べてみろよ」

風間「なによ・・・このバスと・・・、このバス・・・壊れてる・・・

私のバス・・・壊れてる・・・・」

染井「この際、お前のせいかどうかはもういいけどよ」

風間「え？」

染井「死んだよ」

風間「え？」

染井「お前のオヤジさん、いや、ここでは社長か。死んだよ。

可愛く言うと、死んだにやん、デスニヤン」

風間「なぜ可愛く・・・・」

染井「お前、新聞とか見ないのか」

風間「み、見ないにやん、デスニヤン」

染井「デスニヤン関係ないだろ・・・、

死んだ。お前のオヤジどころか、この工場で働くやつの

ほとんどが死んだ。社員旅行のバスが谷底に落ちたんだよ。

ほぼ全員即死。生き残ったのは、まあ、その、なんつか、俺だけだ」

風間 「死んだ？」

染井 「うん」

風間 「お父さんが？」

染井 「うん」

風間 「な、なんだあ、私やったじやん！！私やってやったじやん！！

しかも捕まらない方法で、完全犯罪で、ねえ！」

染井 「きっと偶然だ」

風間 「偶然じゃないよ、だって飛行機、列車に続いてバスでしょ、

3回も續けば偶然じゃない」

染井 「偶然だ！！」

風間 「じゃあ何？偶然が3回続いたらだけだっての？そんな馬鹿な」

染井 「あるだろそういう事だって、偶然が3回続くことだって」

風間 「あ、やばい、そうか、わかったわかつちやつた」

染井 「なんだ今度は」

風間 「うわー！ そうだ、簡単だ。簡単なことだ！ シンプル、モアシンプリー！！

そうだ！！いえーい！きやーいー！おうーん！！えいや！（ダンボール蹴る）」

染井「蹴るな！」

風間「そうだそうだ」

染井「だからなんなんだよ！！」

風間「（バールを染井に渡して）お願ひします！！」

染井「なんだよこれ」

風間「バールのようなものです」

染井「それは知ってる」

風間「ひと思いにお願いします」

染井「え？」

風間「ガーンと！それで、この辺りを！あ、この辺りかな。どの辺りだと思います？」

染井「ちょっと待て話を進めるな」

風間「あとは私が死ねばいいんです。それでこの不幸の連続は終わります。

悪魔の子が死ねば、世界は平和になるのかも」

染井「俺が人殺しになる」

風間「だって自分の死ぬのは怖いもん。そこは譲れない。そこは無理。

自分は可愛いもん、だからここは、思い切って、私を助けると思って

私を殺してください」

染井 「助けると殺すが同居するとは」

風間 「あなたたって、私の話を聞いて、いかに私が人を不幸にするか、

いかに私が誰も救わないかわかったはずです」

染井 「俺は生き残った」

風間 「それは、そうですけど。でもそれはたまたまで、次は巻き込まれて

死んじやうかも」

染井 「俺は救われた」

風間 「それは違います、救っちゃいませんよ。偶然です」

染井 「3回続ければ偶然じゃないって言つただろ」

風間 「だから」

染井 「3回続いた」

風間 「え？」

染井 「ここからは、俺の、幸せの話だ。お前の不幸話とは逆にある」

風間 「は？」

染井 「俺はなあ、奇跡の人と呼ばれている。何故だかわかるか？・・・

それはな、俺が10歳の時に飛行機事故で唯一生き残り、

そして、20歳の時に列車事故でこれまた唯一生き残ったからだ。

俺はなあ、死ないんだ」

風間 「あなた、もしかして染井さん？」

染井 「知ってるよなあ。この前も新聞に載ったよ。奇跡の子三度助かる」

風間 「二度目までしか知らない」

染井 「飛行機事故の時は、まぁこんな言い方はあれだけど、良かった。

大人たちは優しかった。唯一生き残ったんだ。神の子みたいな扱いだ。

だけど、列車事故の時から雲行きが変わった。人間ってさあ、

もうわかんないもんは、怖いんだよ。ここからは賛否両論つーか、

神と言うやつもいれば、悪魔という奴だって出てきた。

そらそうだ、2回も生き残ったんだから」

風間 「サインください！」

染井 「だからこんな田舎の工場で働いてたんだよ。もう都会になんか、

いざらくなってさあ。そしたら今度はバスだろ？みんな死んだ。

おれ以外。この一ヶ月は悪魔として過ごした。

俺のせいなんじやないかって、俺が乗ると乗り物が事故って、

俺は生き残り、ほかは死ぬ。俺は、悪魔なんじやないかって」

風間 「あの、サイン・・・」

染井 「(サインしながら) だから、その」

風間 「あ、サインがうまい、練習した上手さだ」

染井 「恥ずかしい推測するなよ。だから、その、なんつか、お前が現れて
俺は救われた」

風間 「え？ 意味わからない。救われたって」

染井 「ずっと俺のせいだと思ってたし、思われてたんだ。だけど、お前は
自分のせいだという」

風間 「そうです！ 自慢じゃありませんが私のせいなんです！」

染井 「自慢はしない方がいい。だから、俺もお前のせいにする。徹底的に
お前のせいだ！ お前が何かを壊せば、それは実際に起こる。
お前が飛行機のおもちゃを壊せば飛行機事故が起こる！」

風間 「そしてあなたは生き残る」

染井 「列車のおもちゃを壊せば連射事故が起こる！」

風間 「そしてあなたは生き残る」

染井 「バスのおもちゃを壊せば」

風間 「あなたは生き残る」

染井 「・・・・・・・」

風間 「・・・・・・・」

染井 「お前は俺のなんだ！？」

風間 「知りませんよ！」

染井 「お前と俺が揃うとダメなんじやないのか！？」

風間 「あなたがその乗り物に乗らなければ良かったんじやないの！？」

染井 「お前が言うな、お前が壊さなきや！」

風間 「あなたが乗らなきや！！」

風間、下に落ちているバールを手に取る

風間 「わかつてしまつた・・・・・・」

染井 「なんだよ」

風間 「なんの因果か知りませんが、あなたと私はセットなんです。

殺人コンビなんです。私がミッドフィルダーで、あなたがフォワード」

染井 「お前の文字通りのキラーパスを俺が受け取って」

風間 「あなたが点を決めていたんです。殺人ゴールデンコンビなんです」

染井 「お前の罪は」

風間 「あなたの罪でもあるって事ですよ」

染井 「それでなんで、バール？」

風間 「ののようなものです」

染井 「いや、わかる。俺はもう気づいている。気づいていながらも、

脳みそが気づくなと言っている。危険信号ってやつだな」

風間 「コンビを解消しましょう」

染井 「組んだつもりはないけれど」

風間 「組んでいたんです私たち」

染井 「組んでいたのか俺たち」

風間 「だから今から最後の仕事です。コンビとしての」

染井 「最後の」

風間 「最後の殺人です」

染井 「少し待て、今から少しだけ現実逃避をするから」

風間 「少しってどれくらいですか？」

染井 「まあ、焦んなってば」

染井、ダンボールをごそごそして。

染井 「この工場、閉まるんだ。まあ従業員がみんな死んじやったってのもあるけど、

なにより、社長に跡取りも居なかつたし」

風間 「私、娘なんんですけど」

染井 「まあ、それが証明されれば、あれなんだけどさ。どっちにしろ、

もう閉まる。片付けてんだよ。俺一人で」

風間 「もういいですか？現実逃避」

染井 「ああ、やっぱり・・・」

風間 「なんですか？」

染井 「お前が何回も蹴るから・・・でもこの場合どうなるんだろうなあ」

染井、ダンボールからミニチュアを出す。

染井 「これ、この工場のミニチュア、俺が作ったんだけどさあ」

風間 「もしかして」

染井 「お前が何回も蹴るから壊れちゃってんなあこれ。

偶然か必然か、そんな事はどうでもいい。一つ共通しているのは、

お前が壊したものに連動して事故が起こり、必ず俺一人が生き残る。

そしてこの工場には俺とお前しかいない」

風間 「必ずあなたは生き残る」

染井 「どんな方法で事故が起こるかはわからんが、今回も生き残るのは俺だ」

風間 「そ、その前に力づくで！あなたを壊す！！」

染井 「そんな事してなんになる？」

風間 「それしか、可能性がないもの！！あなたが希望なの！変な話かも

しないけど、あなたが死ぬことだけが私の希望だもん。

あなたがいなければ、私はなんの能力も持たない普通の子に

なれるかもしれない！！

この淀みに淀んだ人生の中で唯一見つけた可能性だもん！！」

染井「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

風間「だから私のために死んで！」

染井「だから俺のために死んでくれ！！」

風間「おかしなこと言わないで！！」

染井「何がおかしいもんか平常運転じゃあ！！」

風間「さっきチャンスあげたでしょう！そのチャンスを不意にしたのはあなた

なんだから！ここからは私のターン！！」

染井「そんな馬鹿げたルールがあるか！！」

風間「えいや！！（バールを振るう）」

染井「あぶない！！」

風間「えいやあ！！（バールを振るう）」

SE ガキン！！

SE ボッ！！

染井「ああ！！」

風間「ああ！！」

染井 「とても説明的な言葉選びにならざるを得ない！！ならざるを得ないが、

お前のバールのようなものでガソリンタンクに穴が空いた上に、

そのバールのようなものがガソリンタンクに当たって起きた火花で火がついた！」

風間 「ご丁寧に！！やっぱりそうだ。事故は起きるんだ。今回ばかりは

私が起こした感満載だけど」

染井 「そして俺は生き残る」

風間 「今まで100発100中でそうなんだよね。例外は一度もなし」

染井 「なあここで例外を作れば、俺もお前も生きてていいよなあ」

風間 「例外？」

染井 「多分、いんや、もうここまでできたら多分でも何でもいい！

お前の事故では俺は死なない。という事は多分」

風間 「なんなの多分多分って、多分にとりつかれでもしました？」

染井 「お前の事故を防げるのは俺だけだ！！」

風間 「どこに行くんです？そっちは火の海ですよ！！」

染井 「もし、俺が死んだら、お前の呪いなんてなかったって事だ。俺が火の中でも

生きていれば、呪いは本物だ。ただ！！俺とお前が、助かる方法は

火の中にある」

風間 「火の中に」

染井 「こここのスプリングラーさあ、手動なんだよ」

染井はけていく

風間 「染井さん！！わかりました。あなたのその賭けに便乗するわけじゃないですが！」

こうしませんか！！もしこれで2人とも助かったら！！

ここで、私と、もう一度、おもちゃを作りませんか！？

二度と壊れないように。事故がどうとかじゃないんです。

ほら、おもちゃって壊れたら悲しいじゃないですか！！

おもちゃは子供の希望なんです！！だから、もし、ここから

2人とも助かったら、今までのあなたとわたしの罪を！

おもちゃで償いませんか！？今まで2人で殺した分！！

人を笑顔にしたいんです。あたし、こんなポジティブな提案を

したの初めてなんです！！今までがちでネガティブ人生を歩んでたから！

だから、もし！もしもし！もしもーし！！・・・・・染井さん。

ちょっと染井さん？やばい・・・染井さん、燃えたかもしれない・・・

でも、だとしたら・・・私の呪いなんて、染井さんの奇跡なんて・・・

ただの気のせいだったって事？」

SE ザ——————（スプリングラー起動）

風間 「冷たい！！」

風間、傘をさす

風間 「染井さん？」

染井 傘をさしながら戻ってくる。

染井 「なんか言った？」

風間 「言ってないです」

染井 「ずっとなんか言ってなかつた？」

風間 「あ、だから、もし、2人とも助かつたら。

ここで、一緒におもちゃ作りませんか？」

染井 「あ、ああ、うん」

風間 「いいと思いませんか？」

染井 「いいと思うよ。かなり。でもさあ」

風間 「でも？」

染井 「この工場の機械、もうダメだろ」

風間 「あ、そうかあ」

染井 「でも、まあ、そうかあ。一から作るのも悪くないかもなあ」

風間 「染井さん？」

染井 「俺さあ、この工場片付け終わったら、死のうと思ってたから」

風間 「私も、お父さん殺したら死のうと思ってた」

染井 「だからさ、一からやり直す。俺、初めて誰かと一緒に助かった」

風間 「私も初めて誰も殺さなかつた」

染井 「工場長」

風間 「？」

染井 「工場長だらあんた」

風間 「え？ 多分。そうなるはずです」

染井 「じゃあ、どうする？」

風間 「ん？」

染井 「仕事くれよ。まず、何を作る？」

風間 「んー？ じゃあまず、工場をつくりましょう」

染井 「そうだな、そら、そうだなあ。んじゃあ、水止めといて」

風間 「あ、消えてる」

染井 「俺、その辺の穴空いた壁埋める材料買ってくるから」

風間 「あ、はい」

染井 「あと、色々とよろしく工場長」

風間 「風間です、風間薫」

染井 「社長と同じ苗字じやねーかよ。あの社長、ばついち隠してたのか」

染井はける。

SE ザ—————消える。

風間が振り返ると、そこに、森尾（山崎）と木村（川井J）が立っている。

風間 「今日からここは私の工場です！！みなさん、おはようございます！！」

2人 「おはようございます」

木村 「あの、仕事引き受けといてなんなんですが、ここって何する工場なんですか？」

風間 「木村さん、いいことを聞いてくれました。わたしたちがやるのは」

風間ブリッジをする。

風間 「おもちゃ作りです」

木村 「ブリッジ関係ない」

森尾 「おもちゃって」

森尾ダンボールをごそごそする。

森尾 「これみたいな。国産車のミニカーみたいなやつですか？」

風間 「そうそう！ ゆみちゃん察しがいい、あっ・・・・（受け取ろうとして壊す）

これはなんか、ちょっと壊れちゃったけど！！」

外から車の事故る音がする。

SE キキーッガシャーン

風間 「あっ・・・・。えーと・・・・」

3人外を覗きこむ感じで。

3人 「染井さーん、大丈夫ですかー？」

ME

OP、事務所を組み立てていく。